

「マラソンマン」 (マンガ) 著者:井上正治

講談社(全19巻, 379~388円, 1993~97年)

紹介者:榎本博康

[あらすじ]

かつて福岡国際マラソンで優勝した高木勝馬は、今では小学校三年生の息子、一馬と二人で暮らすタクシー運転手。しかし、別れた妻が息子を取り戻そうとしていることから、息子に父親を選んでもらうため、再びマラソン選手としての活躍を期す。このとき年齢三十六歳。

復活を目指す福岡ではラストランナーであったが、次は夏の北海道マラソンに備える。三十九歳の米国人ドーンから、年齢にあったトレーニング方法を伝授される。そして優勝。次の東京国際も雪のなかを逆転優勝。

一方世界では賞金稼ぎを自認するエチオピアのマモが台頭。そしてパリでの世界選手権、勝馬やマモらが凱旋門を一斉にスタートした。(～六巻)

六年後、一馬は水泳で高校日本一。勝馬がパリでゴール直前に死亡したことが回想される。マラソンは嫌いだ。しかし、あのマモが一馬の水泳競技を見に来た。

四月に筑摩大学に入り、意外にも競走部に。しかし水泳とは体の作り方が違い、お荷物のDグループ。だが夏合宿で、四年生のエリートランナー、阿川に山中の特訓を受け、柔軟で二十キロメートル以上を走れる体を作る。

箱根駅伝に万全を期すため、全日本学生駅伝は辞退の学校方針。しかし落ちこぼれのCDグループで参加し、各人の能力を出し切り総合九位。(～十二巻)

幼なじみの京香がヤクザ金融で窮地に。一馬は単身乗り込むが、浮浪児あがりのヒロシとの二十キロ走で決着をつけることに。この二人は親友になるが、賭博レース疑惑で箱根出場が微妙に。

一馬は箱根駅伝の最終区。W大とのマッチレースを制し優勝。ところがゴールで賭博疑惑で失墜した男が一馬を刺そうとし、ヒロシがその凶刃を体で受けとめる。死、そして一馬の失踪。(～十六巻)

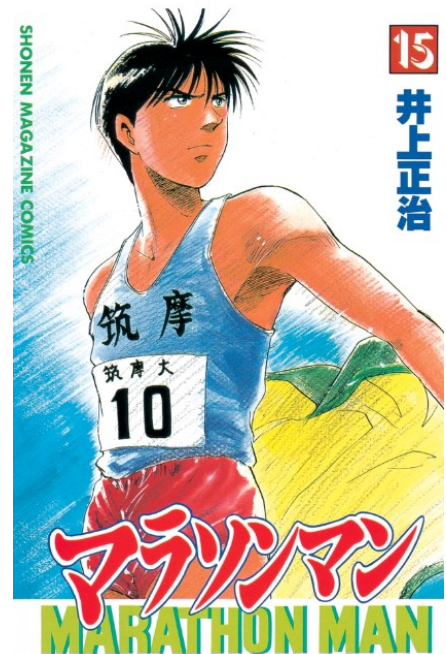
そして五年。北海道の知人の牧場へ行く阿川は、偶然一馬の運転するタクシーに乗る。心を取り戻した一馬は再び阿川の特訓。そして北海道マラソン。そこでマモと競い、二位ながらマモを精神的に乗り越える。そして二年後のオリンピック、時代はラストを競い合う阿川と一馬、ふたりのものだ。(～十九巻)

[感想]

登場人物の性格を表現するために、エピソードをふんだんに入れた、丁寧な作りの話である。そして、日本人のマラソン観を端的に表現している。

駅伝からマラソンへという構図、これは瀬古や谷口らエリートランナー達のコースである。一馬は苦労を重ねるが、大略同じコースを歩んだ。

さて最後の競り合いでは、精神力に勝るものが勝利する。マラソンはハングリーでなければ勝てない、これがこの本のメッセージのひとつである。そのハングリー精神を培う土壌であるが、登場人物



は誰でも暗い過去や苦労を背負っている。マモにしても貧しい境遇に育ち、義父殺しの十字架を背負っている。しかし冷血な人物として登場しながらも、後進の育成に心がけている姿が明らかになるにつれて、覇者でありながら王者の風格を示す。一馬はやっと自分が走れるようになって物語が終わるが、将来このような面でもマモを越えられるのだろうか。

この話では、父から子へと思いが伝承され、成就するが、これは何処に由来するパターンであろうか。フロイト流には、男は父親殺しの原罪を背負っている。いわゆるギリシャ神話に由来するエディプスコンプレックスだ。日本でも日本武尊(やまとたけるのみこと)は父の景行天皇に警戒されて、死の蝦夷征伐に行かされるなど、神話の世界は父子の確執に彩られている。儒教思想にはこれを防止する目的もあったのだろうか。いやこれに依らずとも、生業が世襲であった時代には、洋の東西を問わず、父から子に技術と財産が継承された。生活のためだ。所で、宮崎駿の天空の城ラピュタで、パズーは見事に父の夢を成就するが、これはあり得ることだろうか。私は冷たく言い放ちたい、父と男子で、富と権力は継承されるが、夢はできないと。夢は非常に個人的なものだからだ。

この話の中で私が好きな部分は、ドーンが年齢に合ったトレーニングということで、禅によるリラグゼーションまで取り入れている所である。幼い一馬が科学的トレーニングを父に指導する所も面白い。

日本は男子マラソンで再び世界的な選手を輩出できるだろうか。私はそのためには、他のプロスポーツと同等以上の収入が必要と思う。父の夢だけでは走れない。マラソンは二十台後半という比較的高齢が競技適齢期であるため、世に出て仕事を覚える時期を走って過ごすこととなり、競技以降の第二の人生に大きなハンディを負う。それだけにチャンピオンシップや肖像権に見合う収入が必要である。そうすればマラソン世界記録リストと春に恒例の所得番付に、日本のマラソン男子選手がきら星のように並ぶ時代が来るだろう。

(初稿1998. 9. 23)

[リバイバル感想]

現在の私はエリートランナー達の記録には全く興味が無く、最近のマラソンランナー達の名前も記憶していない。初稿を書いた当時の思いは、3分/kmのラップタイムが実現するとマラソンの記録は2時間06分35秒となるので、この記録が一つの目安になると考えていた。当時は世界でだれも出していない記録であった。

所が今はどうか。今年(2020年)3月のリストであるが、世界記録はEliud KIPCHOGE (エリウド・キプチョゲ、ケニヤ、33歳、2018年ベルリン) の2:01:39である。以降100位までではほとんどがケニアとエチオピアの選手で占められていて、全てが3分/kmより早い。日本人第1位は大迫傑の2:05:29 (28歳、2020年東京) で、世界84位である。日本人ではあと設楽悠太(2018年東京)と高岡寿成 (2002年シカゴ) が3分ラップを切っている。2時間10分を切っている日本人が117人。

このキプチョゲは2019年10月12日にウィーンでサブ2 (2時間未満) を狙った非公認レースを1:59:40で走った。ペースメーカーは村山紘太を含む41名。ラップは2分48秒~50秒/kmであった。公認レースでサブ2が実現する日が現実的になってきたようだ。

一方女子は日本人トップスリーが野口みずき(27歳、2005年ベルリン)、渋井陽子 (25歳、2004年ベルリン)、高橋尚子 (29歳、2001年ベルリン) であり、いずれも2時間19分台で、世代交代が進んでいない。ちなみに女子の世界記録はBrigid Kosgei (ブリジット・コスゲイ、ケニヤ、25歳、2019年シカゴ) の2:14:04である。日本人の3人は世界ではそれぞれ17位、27位、30位である。

興味が無いとはいえ、久しぶりに記録を見ると、特に男子は随分と様変わりしていた。私はアスリートの心情を全く理解できていないので、1秒の記録短縮と人生とを引き換えることにはついていけない。

いつだったか、確か30年くらい前、河口湖マラソンのゴール後で同宿者と談笑していたとき、私はいかに練習を少なくして、レースを完走するかが課題だと話したら、練習計画を立てて毎日実行し、このマラソンに臨んで私と同じくらいにゴールした方が、急に不機嫌になってしまった。

ということで、深く反省した。アマチュアマラソンとは言え、それぞれの人の取り組みには、それぞれの思いがあり、それをくさしたりする気持ちは毛頭無いとは言え、その思いを傷つけてしまう結果となった。それ以来、練習はしないとの発言は極力しないようにしている。それでも今思うと、その頃は現在よりもはるかに練習をしていた。数値で言えば、熱心な人は300km／月以上を走るが、私は100km／月に届くか届かないかであった。月に2回マラソンを走ればほぼその距離であり。100kmウルトラの場合は、それだけで足りる。つまりそういうことである。

なお初稿の感想に出てくる所得番付（高額納税者公示制度）は2005年分までで廃止された。時代の変化を感じる。

(2002. 7. 21)